

天間林村史

(上卷)

題字・天間林村教育長 宮沢正一



天間林村役場



村 章

円と翼を組み合わせて天間林の「天」の字を模擬したものである。
円は村民の協和、円満を意味し、翼は、向上飛躍を象徴したものである。
昭和36年9月16日制定

天間林村民歌

作詩 吉田 敬一郎

作曲 南 ひろよし

一、見よ八甲田背に負いて

東に遙か太平洋

平和の虹の照るところ

希望の朝に呼びかけて

天間林に潑刺と

拳るわれらに誓あり

二、見よ地に満ちて脈打てる

資原の山を野の幸を

勢いて拓く汗水に

黄金は稔り花と咲く

天間林に営々と

励むわれらに誇あり

三、見よこの恵み坪川の

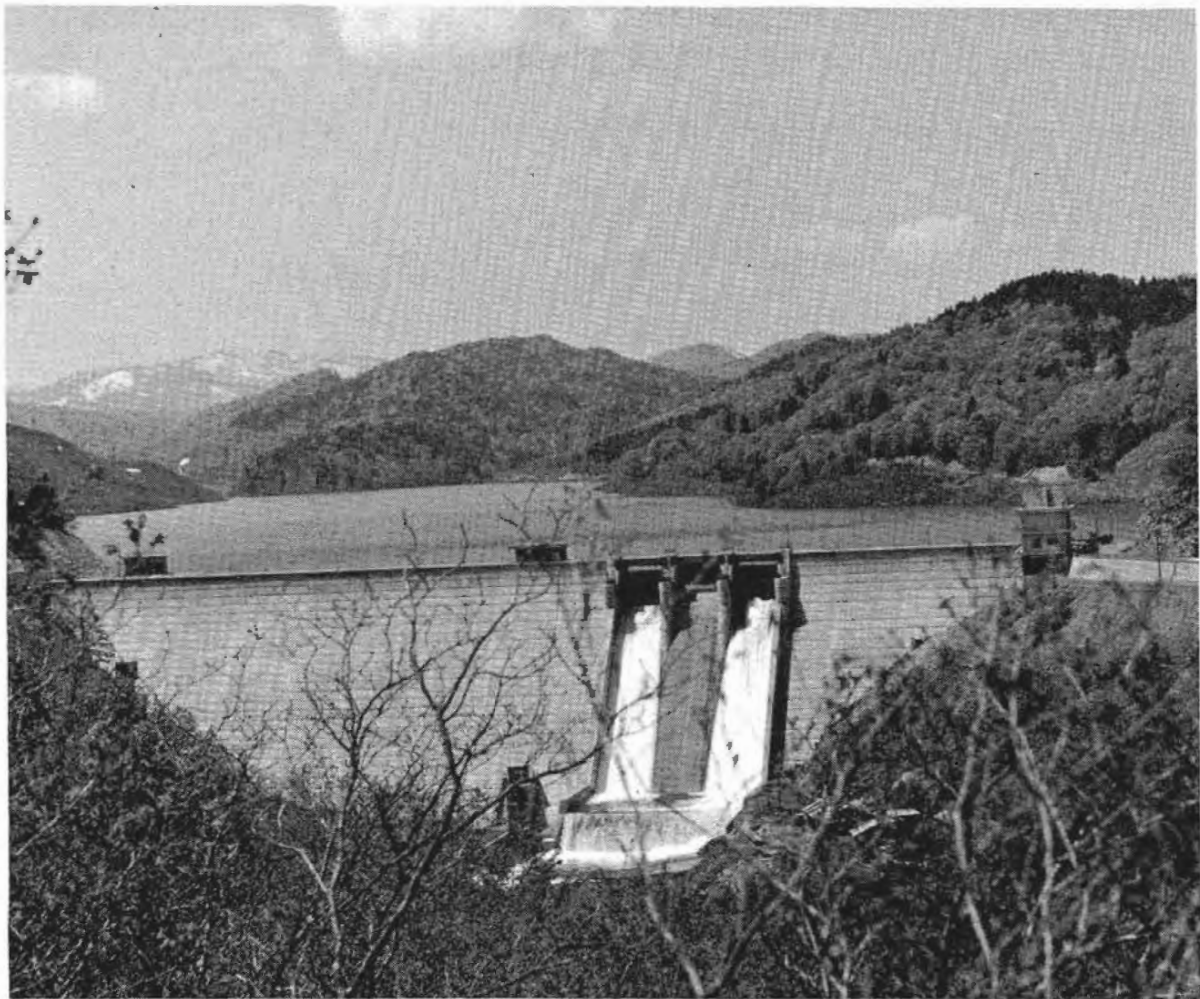
めぐりて清き夢の里

栄をここにとこしえの

明るい自治をさし招く

天間林に手をとりにて

進むわれらに光あれ



天間ダム

原始時代



二ツ森貝塚出土土器（縄文時代中期）

古代



小又 松ヶ沢遺跡出土須恵器

中世



天間館城址

一 高井村
 一 高井村
 一 高井村
 一 高井村
 一 高井村
 一 高井村
 一 高井村

一 高井村
 一 高井村
 一 高井村
 一 高井村
 一 高井村
 一 高井村

一 高井村
 一 高井村
 一 高井村
 一 高井村
 一 高井村
 一 高井村
 一 高井村

一 高井村
 一 高井村
 一 高井村
 一 高井村
 一 高井村
 一 高井村

一 高井村
 一 高井村
 一 高井村
 一 高井村
 一 高井村
 一 高井村

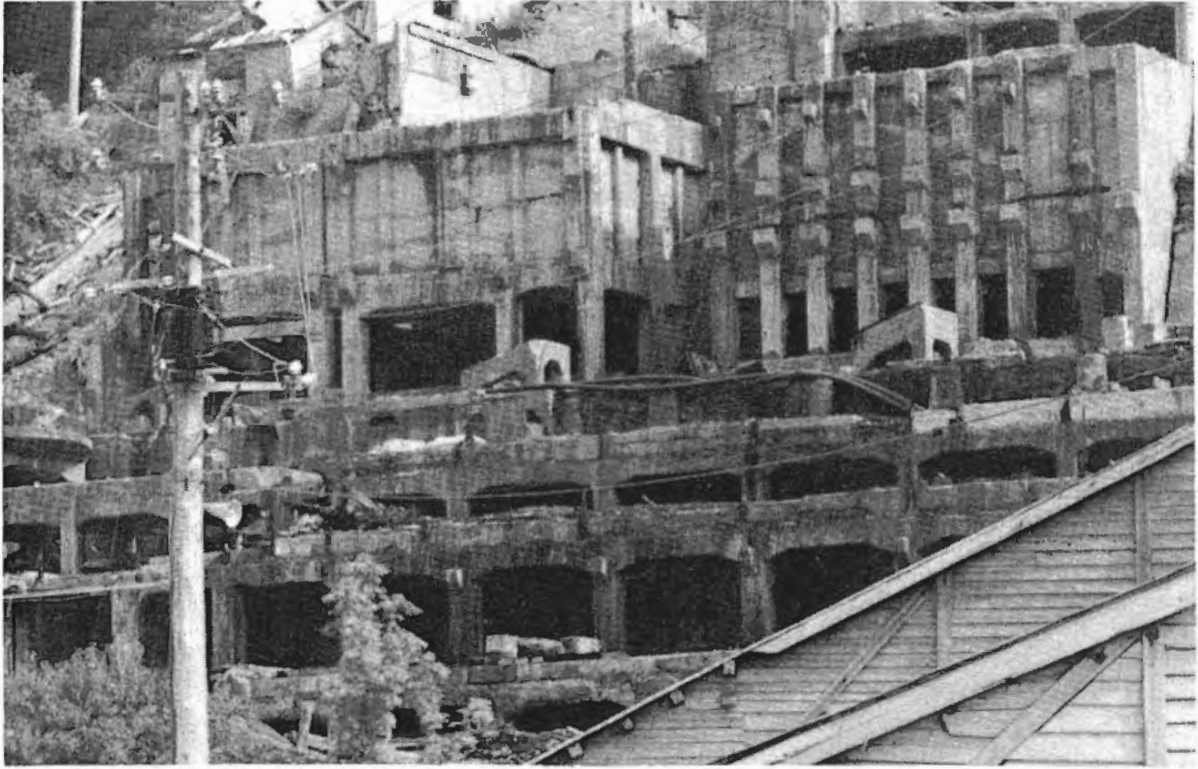
一 高井村
 一 高井村
 一 高井村
 一 高井村

一 高井村
 一 高井村
 一 高井村
 一 高井村
 一 高井村
 一 高井村

一 高井村
 一 高井村
 一 高井村
 一 高井村
 一 高井村

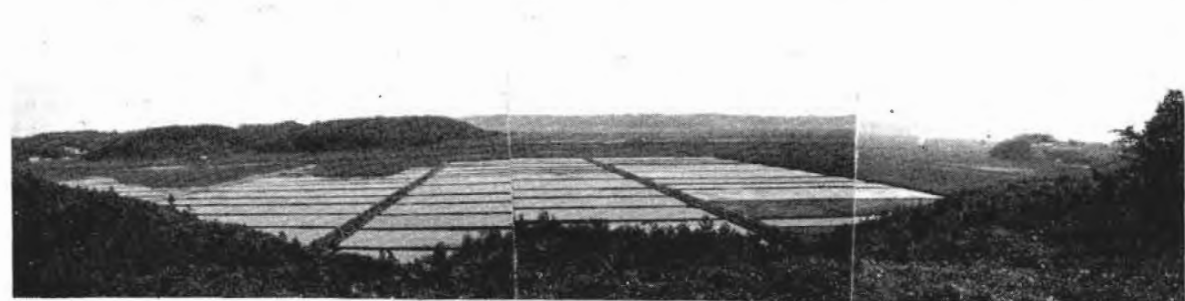
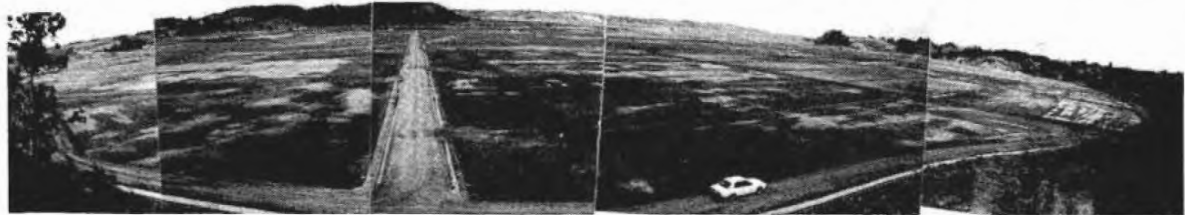
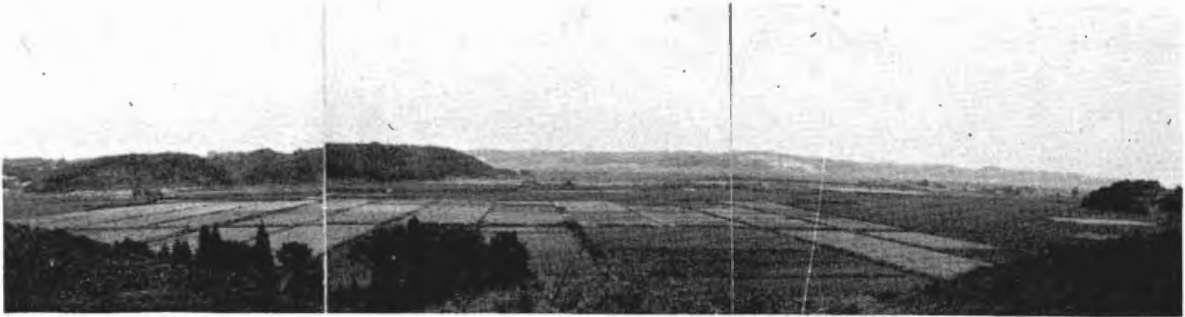
明和七年(1770)七戸御代官所惣高井村家数書上帳(部分)

近代



休山の上北鉦山





農業基盤整備 県営圃場整備事業(榎林地区)



発刊のことば

天間林村長 工藤 敬一

このたび、「天間林村史」編纂も成り刊行の運びとなりましたことは、村民の皆様とともに喜びに堪えません。

「温故知新」のとおり明治二十二年町村制施行により天間館外六ヶ村が新生天間林村として開村、爾來九十年有余、今日の郷土社会を築きあげた先人の歩んだ艱難辛苦の歴史を究め、現在の村勢を見つめて将来の飛躍への第一歩とすべきものとして記録保存し、これを後世に伝えることは現代に生きる我々の責務であると考えます。

昭和四十六年度村史編纂に着手、それ以後、資史料の収集等幾多の困難を克服し、十年有余の歳月を経て完成をみるに至ったわけで

ありますが、この間、東奔西走した青森大学長盛田稔氏をはじめ関係者各位の御苦勞に対して心から深甚なる敬意と感謝の意を表する次第であります。

本村が限りない未来にわたって発展を続けていくために課せられた我々の最大の使命は、絶えず村振興のための努力を惜しまず傾注し、より豊かな住みよい村づくりをめざすことであり、その意味において本書は史的考証を加えた農業経済史的な編纂内容となっております。我々の心の糧となることを確信しております。

本書が広く村民の皆様にあ読され、郷土の歴史に対する認識を深めて新しい時代に対処し、天間林村のかけ橋とならんことを願って止みません。

昭和五十六年三月

監修のことば

盛田 稔

天間林村史の誕生は難産であった。

私は、市町村史の類は、人を得られるなら地元の人が執筆するのが最適であると考えていたので、最初村史編さんの話がもちこまれた時監修だけを引受けた。

編集委員に選ばれた天間林地区内の学校の先生方や協力委員の方と私との間で勉強会が何回かもたれた。

各委員の方には随分御苦労していただいた。

しかし、転勤その他の事情が重なり、編集委員会は改組の必要に迫られ、早急に新しい執筆者を選定しなければならなかった。

この時期は私の生涯にとって最も多忙なときであったが、忙しいなどと言っていられなくなった。

そこで、学縁を頼りに、考古編は村出身で県文化課勤務の天間勝也氏に、近現代編は青森大学の末永洋一・佐々木崇暉氏に、教育の部は西小学校長秋山正信氏に依頼し、古代・中世・近世編は私が担当することとなった。

これらの人々に残された年月は少なかった。従って、執筆は時間との戦いであった。
編集・執筆の方針は次のように定められた。

天間林村は、古代以前はともかくとして、中世以降ほとんど地方の政治・経済上中心的地位を占めたことがなく、七戸南部氏もしくは七戸代官所の支配下に属する純農村であり、そこに住む人々のほとんど全部が零細な農民であった。

こういう基本的認識に立って、天間林村史は、其処に住む農民が生きるためにどのような努力を積み重ねてきたか、ということを描え、記述さるべきものであること。

他の市町村史に往々見られるような平板な羅列主義はとらず、農村天間林村の歩みがわかるような事項を徹底的に追究すること。

高校生程度の学力で十分理解できるようなものにする。

このような方針、特に第二の方針のため、天間林村史は一般の市町村史とは大分趣を異にしたものとなった。

この点については、市町村史の新しい型を提示し得たものと思っている。

ただ第二の方針が強く出過ぎたため、記述し終ってみたら、かなり難かしいものとなっていた。

あるいは高校生程度で楽に読めるようなものにしたいのと第三の方針には、十分に沿えないものになったのではないかと恐れている。

この点お詫び申し上げるとともに、これを土台とし、やさしいものに編集し直すことを提言したい。そうすれば、紙数の関係上割愛せざるを得なかった宗教・信仰・民俗等についても触れることが出来よう。

最後に刊行の遅延にもかかわらず御支援下さった村当局、議会、資料提供者、村民各位ならびにとりわけお世話になった村教委当局に厚く御礼を申し上げます。

凡例

- 一、全体を原始時代編、古代編、中世編、近世編、近代編、現代編と分けてあるが、近代編とは明治元年より昭和二十年まで、現代編とは、昭和二十年以降である。
- 二、史料は読み下し文を原則としたが、差し支えないものは原文のままとした。
- 三、写真、図表は適度に挿入することとしたが、特に古代編にはかなりの分量が挿入されている。
- 四、文章はなるべく平易にするように心がけたが、一部においては学術上の専門用語もかなり入っている。
- 五、本書は、全体として通史の形をとっているものの、重要事項、事件に関してはかなりの分量をあてて記述されている場合もある。
- 六、全編分担執筆の方法をとったので、文体、用字、用語には統一を欠くきらいがあることをおわびしたい。
- 七、本書を一つの材料として、さらに深く天間林村の歴史が追求され、新しい村史がやがて執筆されること、そしてまた児童、生徒も容易に読める村史もやがて編集されることを期待したい。
- 八、本書の執筆分担はつぎのとおりである。

第一編 原始時代 天間勝也

第二編 古代

第三編 中世

第四編 近世

第五編 近代 第一章 第二章

第五編 近代 第三章～第十一章 末永洋一

第五編 近代 第十二章 秋山正信

第六編 現代 第一章～第八章 佐々木崇暉

第六編 現代 第九章 秋山正信

盛田稔

目次

口 絵

発行にあたり

監修のことば

凡例

(上 卷)

第一編 原始 一

第一章 旧石器時代 三

第二章 縄文時代 七

第一節 草創期 七

第二節 早期 九

第三節 前期・中期 一〇

第四節 後期・晩期 一一

第三章 弥生時代 二六

第二編 古代 五一

第一章 県南最古の村 都母村 五三

第一節 都母村の住民 五三

第二節 弘仁二年文室綿麻呂による蝦夷征伐 五六

第三節 戸の起源 六七

第四節 弘仁四年文室綿麻呂による蝦夷征伐 七〇

第二章	壺の碑伝説と都母村	七三
第一節	歌枕「つぼのいしぶみ」	七三
第二節	千引の石	七七
第三節	多賀城碑即「つぼのいしぶみ」説	七八
第四節	坪村の碑即「つぼのいしぶみ」説	八〇
第五節	「つぼのいしぶみ」複数存在説	八五
第六節	南部地方に伝わる「つぼのいしぶみ」伝説	八六
(一)	石の数を一コとするもの	八七
(二)	石の数を二コとするもの	九〇
第七節	明治期以降の「つぼのいしぶみ」論	九四
第八節	結言	九八
第三章	前九年の役と青森県	一〇一
第一節	空白の時代の営み	一〇一
第二節	陸奥と馬	一〇三

第三節	奥六郡の司 安倍氏	一二〇
第四節	“奥六郡”の奥の支配者 安倍富忠	一二三
第五節	安倍氏の滅亡	一二七
第六節	安倍氏と青森県	一二九
第四章	後三年の役	一二一
第一節	後三年の役の発端	一二一
第二節	六郡二分 清衡・家衡兄弟の争い	一二四
第三編	中世	一二九
第一章	源頼朝の奥州平泉藤原氏征伐	一三一
第一節	藤原氏征伐の目的	一三一
第二節	南部光行の糠部拝領説	一三四
第三節	義経伝説	一三八

第四節	大河兼任の乱	一四一
第二章	平泉藤原氏と青森県	一四五
第一節	藤原氏の地位	一四五
第二節	藤原氏の財力の源泉	一五一
第三節	藤原氏と青森県	一五三
第三章	南部氏の糠部下向	一六一
第一節	南部光行の糠部下向	一六一
第二節	七戸太郎三郎朝清の七戸入部	一六五
第三節	七戸氏の系譜	一六七
第四章	南北朝時代の争乱	一七四
第一節	鎌倉時代末期の糠部の給人	一七四
第二節	建武の中興と根城南部氏	一八二
第三節	北畠顕家の下向と根城南部氏	一八六

第四節	南北朝時代の開幕と根城南部氏	一九〇
第五節	四世師行の戦死	一九五
第六節	五世政長の活躍	一九六
第七節	六世信政の勤皇	二一一
第八節	七世信光の忠節	二一四
第九節	八世政光の勤皇	二二〇
第十節	七戸城と天間館	二二四
第五章	政光による七戸南部家の創設	二三一
第六章	蛎崎蔵人の乱と天魔館五郎右衛門	二三五
第一節	乱の原因と緒戦における根城南部勢の苦戦	二三五
第二節	根城南部勢の攻撃	二四三
第三節	征夷総大将南部政経の出陣と蛎崎蔵人の逃亡	二四八
第四節	南部政経上洛	二五一
第五節	天魔館五郎右衛門と蛎崎氏	二五四

第七章	豊臣秀吉による奥州征伐	二五八
第一節	中世の中央情勢と青森県	二五八
第二節	奥州仕置令	二六〇
第三節	九戸政実の反乱と七戸家国ならびに天間館源左衛門	二六五
第四節	九戸城をめぐる攻防と九戸・七戸氏等の滅亡	二七二
第五節	七戸城の落城	二七六
第八章	中世末期の南部氏の家臣構成	二七八
第一節	家臣構成	二七八
第二節	天間館源左衛門の身分的性格	二八二
第四編	近世	二八五
第一章	新七戸家の誕生	二八七

第一節	南直勝七戸の名跡を継ぐ	二八七
第二節	七戸直時の治世	二九二
第三節	七戸直時の死去と葬式の次第	三〇五
第二章	七戸隼人正重信の治世	三一〇
第三章	盛岡・八戸二藩の分立と七戸	三一五
第一節	南部藩の断絶	三一五
第二節	新南部藩と八戸藩の誕生	三二一
第三節	七戸南部家の断絶	三二三
第四節	代官政治のはじまり	三二五
第四章	南部藩の地方行政組織	三二九
第一節	郡・通・村制	三二九
第二節	代官の職務	三三四
第三節	七戸代官所御給人役職	三四〇

第四節	七戸通の行政区域	三三七
(一)	邦内郷村志(村名・高・民戸数・馬数書上)	三四八
(二)	享和三年御領分郡名村名書上	三五六
(三)	天保七年七戸惣郷村名附	三六五
(四)	安政五年御領分中本村枝村仮名附帳	三六六
第五章	農業生産の構造	三六九
第一節	村位	三六九
第二節	標準反収(斗代)	三七三
第三節	農家戸数と村高	三七七
第四節	農家一戸当りの持高	三八一
第五節	地目構成及び作付構成	三九八
第六章	検地	四〇四
第一節	太閤検地	四〇四
第二節	南部藩独自の地積計算法	四〇五

第三節	農民側からの検地の要求	四〇九
第七章	南部藩の税制	四一〇
第一節	南部藩の斗代・歩付	四一〇
第二節	実際の徴税法	四一八
第三節	諸役	四二二
第八章	凶作と飢饉	四二六
第一節	地獄絵図	四二六
第二節	封建社会の財政的基礎	四二七
第三節	凶作・飢饉の発生原因	四二八
第四節	凶作年表	四三〇
(一)	元和の凶作	四三二
(二)	寛永の凶作	四三三
(三)	元禄の凶作と飢饉	四三四
(四)	宝暦の飢饉	四三七

	(五)	天明の飢饉	………	四四七
	(六)	天保の飢饉	………	四五六
	第五節	救荒食物	………	四六〇
第九章		畜産	………	四六六
	第一節	農業以外の収入源	………	四六六
	第二節	南部地方馬産史概要	………	四六七
	第三節	江戸時代の藩有牧	………	四七〇
	第四節	官馬の飼養法	………	四七二
	第五節	里馬の飼養法	………	四七六
	第六節	農家一戸当り所有馬数	………	四七七
	第七節	里馬の販売法	………	四七九
	第八節	その他の畜産	………	四八六
第十章		百姓一揆	………	四八九
	第一節	百姓一揆の最多発藩	………	四八九

第二節	七戸通の百姓一揆	四九一
(一)	延享二年七戸通地頭排斥一揆	四九二
(二)	寛政八年七戸通馬売買税増税反対一揆	四九三
(三)	嘉永六年五月七戸通夫伝馬税の公平賦課要求一揆	四九三
(四)	嘉永六年七月別段御買上大豆反対一揆	四九五

第十一章 物産の流通 五〇〇

第一節	天間林地方における商品生産	五〇〇
-----	---------------	-----

 第二節 物資の流通組織 五一二

(一)	定期市	五一二
(二)	馬市	五一五
(三)	行商	五一五
(四)	坐商	五一九
(五)	七戸地方一豪商の富	五二〇

第十二章 交通・運輸 五二三

第一節	交通の発達	五二三
第二節	奥州道中宿駅名	五二五
第三節	路傍の整備	五三〇
(一)	一里塚	五三〇
(二)	並木	五三八
第四節	境目番所	五四一
(一)	男女・物資の流出入の取締	五四一
(二)	移出入税の徴収	五四八
第五節	交通・運輸施設	五五八
(一)	駅伝の制	五五八
(二)	助郷の制	五六〇
(三)	飛脚の制	五六一
第十三章	幕末期の七戸御給人名	五六二

(下 卷)

第五編 近代 五七一

第一章 七戸藩の創設 五七三

第一節 南部政信家譜 五七三

第二節 七戸藩創設に関する諸説 五七七

(一) 安政六年説 五七八

一 菊池悟郎著「南部史要」 五七八

二 田中喜多美編「岩手県郷土史年表」 五七八

三 秋田書店刊「藩史事典」 五七八

四 新人物往来社刊「藩史総覧」 五七九

五 岩手県立図書館蔵「七戸藩主南部氏略歴」 五八〇

六 盛岡中央公民館蔵「南部政信家譜」 五八一

(二) 安政六年説批判 五八二

(三)	文久三年説	五九一
一	岸俊武編「新撰陸奥国誌」	五九一
二	「七戸藩支配地之次第申立書」	五九二
三	「新渡戸伝一生記」	五九二
四	明治三年「七戸知藩廳日記」	五九五
(四)	文久三年説批判	五九六
(五)	明治二年説	六〇七
一	「読史備要」	六〇七
二	「奥隅馬史」	六〇七
(六)	結論	六〇八
第二章	明治三年七戸通百姓一揆	六一九
第一節	概要	六一九
第二節	一揆の願条とそれに対する藩の回答	六二四
第三節	一揆に参加した村々	六三〇
第四節	七戸通百姓一揆関係年表	六三三
第五節	一揆の原因	六四三
第六節	一揆の結末	六五三
第七節	全国の動向	六六九

第三章 青森県の成立と天間林村 …………… 六七一

第一節 青森県の成立過程と七戸藩（県）…………… 六七一

(一) 野辺地戦争に至るまでの諸藩の動向 …………… 六七一

(二) 津軽藩による旧南部藩領支配 …………… 六七四

(三) 大関藩による旧南部藩領支配 …………… 六七六

(四) 七戸藩をめぐって …………… 六七七

(五) 版籍奉還と藩知事制 …………… 六八二

(六) 廃藩置県と青森県の誕生 …………… 六八五

第二節 地方行政の変遷と天間林村の誕生 …………… 六八六

(一) 江戸時代末期の「天間林村」…………… 六八六

(二) 青森県七戸支庁設置までの「天間林村」…………… 六九〇

(三) 大小区制時代の「天間林村」…………… 六九五

(四) 「三新法」公布以降の地方自治の動き…………… 七〇二

(五) 天間林村の成立…………… 七〇六

第三節 地租改正と農民…………… 七〇九

(一)	地租改正事業の展開	七〇九
(二)	青森県における地租改正事業とその矛盾	七一二
(三)	上北郡——天間林村など——における地租改正事業とその問題点	七一四
(四)	地租改正とその後	七一九

第四章 天間林村をめぐる政治的諸問題——明治期を中心として——

七二〇

第一節 明治天皇の東北巡幸をめぐる

七二〇

(一) 天皇巡幸と地方官吏・民衆の対応

七二一

(二) 明治九年東北巡幸と天間林村

七二六

(三) 明治十四年東北・北海道巡幸

七二七

第二節 明治期における村政の一側面

七二八

(一) 明治十四年度榎林・附田・二ツ森戸長役場村議会資料について

七二八

(二) 町村制施行（明治二十二年）以降の村政

七四二

第三節 分村問題と天間林村の場合

七六〇

(一) 分村問題の一般的背景

七六〇

(二) 天間林村における分村問題

七六三

第四節 上北郡郡政の発展といくつかの出来事

——天間林村との関連で——……………七七〇

(一) 上北郡会と天間林村

——郡会議員選挙資料の紹介——……………七七二

(二) 上北郡郡役所移転問題……………七七八

第五節 士族復籍……………七七九

第六節 大正十五年天間林農民党創立……………七八四

第五章 田畑開墾事業と天間林村の発展

——明治期を中心として——……………七八八

第一節 新渡戸伝の構想……………七八八

第二節 工藤・中嶋・早川氏による開墾事業……………七八九

(一) 工藤轍郎氏による開墾事業……………七八九

(二) 中嶋勝次郎氏による開墾事業……………七九一

(三) 士族授産……………八〇五

(四) 早川善吉氏の開墾事業……………八〇七

第三節	その他の開墾事業	八〇九
第四節	開墾事業をめぐる問題点	八一九
第六章	馬産政策の展開と天間林村における馬産事業	八二二
第一節	南部馬産業の沿革	八二二
第二節	国立奥羽種馬牧場の創設と発展	八二九
第三節	軍馬補充部七戸支部の開設と天間林村への影響	八四七
第四節	軍馬政策に関する若干の問題点	八六八
第五節	民間馬産の実態——その一斑——	八六九
第六節	馬小作	九〇四
第七節	花松神社と馬産農家	九〇七
第七章	明治期の天間林村と民衆生活	九〇九
第一節	「陸奥国上北郡村誌（参）天間林村」における天間林村 ——明治十年代の「天間林村」について——	九〇九
第二節	林野の官民区分問題と天間林村の状況	九一九

第三節	村民の家族生活と住居	九四八
(一)	「明治七成年改・人頭調書上帳」について	九四八
(二)	明治二十年の戸籍簿	九六四
(三)	住居構造	九七〇
第四節	村民生活の諸様相	九八七
(一)	商業・取引	九八七
(二)	自家用酒造酒の届け出	一〇〇一
(三)	生活の中の知恵	一〇〇三
第五節	「共同体」的關係——特に入会権について——	一〇〇五
(一)	「入会地」問題と「共同体」的關係	一〇〇五
(二)	「共同体」間の關係	一〇一〇
第六節	鉄道（東北本線）と天間林村民	一〇一六
(一)	我国における鉄道建設の特徴	一〇一六
(二)	東北本線の敷設問題	一〇一七
(三)	東北本線敷設時の天間林村における問題	一〇一九
(四)	鉄道とその後天間林村	一〇二八

第八章 苦悩する農村社会と農民生活

	——明治より昭和前半期における農村と農民——	一〇三二
第一節	相次ぐ凶作と疲弊せる農村	一〇三二
(一)	明治十七年凶作	一〇三四
(二)	大正二年凶作の実態とその対策	一〇三九
(三)	大正二年凶作と天間林村	
	——中野石蔵氏の日記から——	一〇五七
(四)	昭和六年、九年、十年の凶作	一〇六五
(五)	昭和九年、十年凶作の実態	
	——中嶋農場の事例——	一〇八一
(六)	昭和九年凶作への天間林村の対策	一〇八三
(七)	昭和十六年凶作時の水稻収穫量調査表	一〇八八
(八)	凶作をめぐる問題点	一一〇八
第二節	農業経営の展開と地主・小作関係	一一一〇
(一)	天間林村における小作慣行	一一一〇

(二)	農業経営規模の推移と天間林村の状況	一一二〇
(三)	地主制の発展と地主・小作関係	一一二九
(1)	地主制発展の一般的経緯と青森県の状況	一一二九
(2)	天間林村における地主制	一一三五
(3)	地主制の展開と地主・小作関係	一一四四
第三節	出稼ぎ・離村の実態	一一五三
(一)	「寄留者名簿」分析より ——明治末より昭和一〇年代における出稼ぎ・離村の一般的傾向——	一一五三
(二)	出稼ぎの実態	一一六二
第九章	農業における技術的改良と発展	一一六八
第一節	肥料、生産用具の発展	一一六八
(一)	馬耕、農業機器の普及	一一六八
(二)	肥料の普及	一一七二
(三)	土地改良	一一七六
(四)	その他の技術改良	一一八二

第二節 中嶋家坪刈表の紹介、分析

——天間林村における稲作技術発展の事例研究——

(一)	序言	一一八三
(二)	耕種期日の変遷	一一八六
(三)	品種の変遷	一一八八
(四)	収量の推移	一一九二
(五)	坪当り株数の推移	一一九五
(六)	一区画水田面積	一一九五
(七)	おわりに	一一九七

第十章

諸産業の発展と新しい産業の開始

一一九九

第一節

明治以降商品作物の発展

一一九九

(一)	「明治三年産業興隆令」について	一一九九
(二)	商品作物栽培の一般的傾向とその変遷	一二〇一
(三)	養蚕の推移	一二〇五
(四)	りんご栽培	一二一一

(五)	その他の農林畜産業	一二一六
第二節	鉱山業の発展	一二一八
(一)	上北鉱山の創立と発展	一二一八
(二)	その他の各種鉱山	一二二四
第三節	七戸水電株式会社の創設	一二二五
第四節	運輸・通信の状況	一二三〇
(一)	運輸・交通の発展	一二三〇
(二)	「南部鉄道」建設をめぐる	一二三一
(三)	通信	一二三五
第十一章	戦争と統制時代の天間林村	一二三七
第一節	戦争と統制の時代	一二三七
(一)	昭和初期の不景気と軍部の台頭	一二三七
(二)	天間林村における状況	一二三九
	——「中嶋信日記」より——	一二三九
(1)	日華事変勃発時の頃	一二四〇

(2)	經濟統制の強化	一二四〇
(3)	大政翼賛会運動	一二四一
(4)	戦時体制下の各種団体	一二四三
(5)	戦線の拡大と戦死者の増大	一二四五
第二節	昭和十年代の農村社会	一二四七
(一)	昭和十年代の農村社会の展開	一二四七
(二)	天間林村における農村經濟更生運動	一二四七
	——天間林村の昭和十年代の状況(1)——	一二五二
(三)	天間林村からの満州移民の実態	一二五二
	——天間林村の昭和十年代の状況(2)——	一二五七
(1)	満州農業移民	一二五七
(2)	開拓団の苦勞——日の出開拓団の場合——	一二五九
(3)	満蒙開拓青少年義勇軍	一二六〇
(4)	白浜末吉氏と満蒙開拓青少年義勇軍	一二六四
(四)	その他戦時下での農業問題	一二六九
(1)	「昭和十九年度上北郡農作物綜合生産計画」の紹介・分析	一二六九

第十二章 戦前の教育 一二七八

- (2) 農村労働力の減少とそれに伴う問題 一二七四
- (3) 供出制度の厳しさ 一二七六

第一節 幕末期の教育 一二七八

第二節 明治の教育 一二八〇

- (一) 文部省の設置と教育方針 一二八〇

- (二) 学制発布による学校設置の計画 一二八一

- (三) 村内小学校の誕生 一二八二

- (1) 榎林小学校 一二八二

- (2) 坪小学校 一二八三

- (3) 中野小学校 一二八四

- (4) 天間館小学校 一二八五

- (5) 花松小学校 一二八六

- (6) 李沢小学校 一二八七

- (7) 二ッ森小学校 一二八八

	(8)	白石小学校	一二八九
	(9)	听小学校	一二九〇
	(四)	近代教育の展開	一二九〇
	(1)	学資金募集の告諭と献納者褒賞	一二九〇
	(2)	授業料	一二九一
	(3)	明治初期の学習内容	一二九一
	(4)	進級制度	一二九三
	(5)	学務委員	一二九四
	(6)	郡視学	一二九五
	(7)	首座教員	一二九五
	(8)	義務教育年限	一二九六
	(9)	明治の就学のようす	一二九六
	(10)	郷土の教育者	一二九八
	第三節	大正の教育	一二九九
	(一)	大正期における教育の概要	一二九九
	(1)	凶作の頃の教育	一二九九

(2)	大正初期の児童心得	一三〇〇
(3)	諸研究会	一三〇一
(4)	通学のようす	一三〇二
(5)	修学旅行のはしり(天間館小学校)	一三〇四
	第四節 昭和の教育	一三〇五
(一)	戦前の教育	一三〇五
(1)	白浜末吉氏の教育	一三〇五
(2)	ニッ森貝塚保存会の設立	一三〇七
(3)	郷土教育の振興	一三〇七
(4)	不況下の教育	一三〇九
(5)	戦時体制の確立	一三一〇
(6)	国民学校の誕生	一三一一
(7)	戦時下の教育	一三一二
(8)	高森鉦山分教場と上北鉦山分教場の誕生と廃校	一三一四

第六編 現代(戦後)……………一三五

第一章 農地改革による農業再編……………一三七

第一節 『改革』前の農業……………一三七

(一) 農村概況……………一三七

(二) 農業構造……………一三九

第二節 農地改革の展開……………一三〇

(一) 第一次農地改革……………一三〇

(二) 第二次農地改革……………一三四

(三) 農地改革の実施過程……………一三七

第三節 農地改革後の農業……………一三七

(一) 農地改革による自作農化とその問題点……………一三七

(二) 農民収奪の深化……………一三九

第二章 戦後開拓と開拓生活……………一三四

第一節	緊急開拓事業計画の成立とその展開	一三四四
第二節	三本木国営開墾事業の成立	一三四八
第三節	天間林における戦後開拓	一三五二
(一)	戦後開拓の概観	一三五二
(二)	一開拓部落からみた開拓生活	一三五二
(三)	疲弊する開拓農民	一三五六
(四)	開拓部落の構造変化	一三五八
第三章	二八年凶作の影響	一三六四
第一節	冷害の概況	一三六四
(一)	天間林における冷害の状況	一三六四
(二)	過去の冷害との比較	一三六六
第二節	冷害の自然的要因	一三六七
(一)	気候条件	一三六七
(二)	水利条件	一三六七
第三節	冷害の経済的・社会的要因	一三六八

(一)	農家構成	一三六九
(二)	生産手段と労働力	一三六九
(三)	出稼状況	一三七一
第四節	冷害の影響	一三七三
(一)	供出状況	一三七五
(二)	農民の経済状況	一三七六
第五節	冷害対策	一三七七
(一)	村当局の対応	一三七七
(二)	県の対応	一三八二
(三)	冷害対策の実施	一三八三
第四章	農村と鉾山開発	一三八九
第一節	上北鉾山の概要	一三八九
第二節	上北鉾山と天間林	一三九五
第三節	底田鉾山の概要	一三九八
第四節	鉾山開発と南部縦貫鉄道	一三九九

第五節	鉾山開発の残したものと	一四〇五
(一)	上北鉾山と銅汚染	一四〇五
(二)	底田鉾山と溷濁水汚染	一四〇八
第五章	天間ダムと開田事業	一四二二
第一節	開田事業の成立過程	一四二二
(一)	土地改良法の成立	一四二二
(二)	土地改良事業の推移	一四二三
(三)	天間林土地改良事業の成立	一四二四
第二節	天間ダム	一四二八
(一)	概要	一四二八
(二)	設計	一四二〇
(三)	用地買収	一四二二
(四)	工事	一四二二
第三節	頭首工水路の概要	一四二五
第四節	圃場整備事業	一四二八

第五節	土地改良と農業構造の変化	一四三〇
第六章	高度経済成長と農村	一四三五
第一節	高度経済成長と農業	一四三五
(一)	高度経済成長	一四三五
(二)	高度経済成長と農業基本法	一四三八
(三)	天間林村における農業構造の変化	一四三九
一	人口の流出と農業労働主体の変化	一四三九
二	農家の階層分化	一四四二
三	兼業農家の増加とその実態	一四四四
四	主要農産物の変化	一四四八
第二節	出稼ぎの実態	一四五一
(一)	出稼ぎの背景	一四五一
(二)	出稼ぎの推移	一四五二
(三)	出稼ぎ農家の実態	一四五五
(四)	出稼ぎ者の実態	一四五八

第三節	集落の変貌	……………	一四六〇
(一)	天間林における集落	……………	一四六〇
(二)	都市化と集落	……………	一四六七
	第七章		
	過疎化と農村近代化	……………	一四七一
第一節	過疎化の諸要因	……………	一四七一
(一)	過疎化とは何か	……………	一四七一
(二)	天間林村における過疎現象	……………	一四七三
第二節	新全総と広域市町村圏の形成	……………	一四七七
(一)	新全総合開発計画	……………	一四七七
(二)	広域生活圈と広域行政	……………	一四七九
(三)	広域行政化と広域事務組合	……………	一四八〇
第三節	過疎地域指定と農村地域工業導入計画	……………	一四八五
(一)	過疎地域振興計画	……………	一四八五
(二)	農村地域工業導入実施計画	……………	一四九五

第八章 天間林村の現況と将来 一五〇〇

第一節 農村の現況 一五〇〇

(一) 地域及び集落の状況 一五〇〇

一 西部地域 一五〇〇

二 中部地域 一五〇一

三 東部地域 一五〇二

(二) 人口の現況 一五〇三

一 人口の動向 一五〇三

二 世帯の動向 一五〇五

(三) 土地利用の現況 一五〇六

一 地域土地利用状況 一五〇八

(四) 産業の現況 一五一〇

一 産業構造 一五一〇

二 農業 一五一一

三 工業 一五二一

四	商 業	一五二二
(五)	生活環境整備の現状	一五二三
一	生活環境の概要	一五二三
二	道 路	一五二四
三	地域排水	一五二五
四	飲用水施設	一五二六
五	廃棄物処理	一五二六
(六)	学校教育	一五二八
(七)	保健医療	一五三一
(八)	社会教育	一五三二
(九)	社会福祉	一五三二
(十)	保 安	一五三三
(十一)	社会組織	一五三四
一	部落会	一五三四
二	青年団	一五三六
三	婦人会	一五三六

四	老人クラブ	一五三六
五	子供会	一五三七
(㉔)	農業協同組合	一五三七
(㉕)	行財政の現状	一五三八
第二節	農村総合整備計画の構想	一五四二
第三節	今後の課題	一五四五
第九章	戦後の教育	一五四九
第一節	敗戦直後の混乱	一五四九
第二節	新学制と教育課程	一五五一
第三節	新生中学校の誕生	一五五二
第四節	教育委員会の発足	一五五三
第五節	道ノ上小学校の誕生	一五五六
第六節	ニッ森教師の会の活躍	一五五七
第七節	教育の成果	一五五八
(一)	堀川小学校に学ぶ(天間館小学校)	一五五八

(二)	健康優良学校県一位を受賞(坪小学校)	一五六一
第八節 現在の教育		
(一)	道徳教育の徹底と学力向上	一五六二
(二)	中部上北教育委員会とセンターの誕生	一五六三
(三)	学校給食の実施	一五六四
(四)	学校の統廃合	一五六六
一	上北鉾山小・中学校の廃校	一五六六
二	統合による東小学校・西小学校の誕生	一五六六
三	東小学校の概要	一五七〇
四	西小学校の概要	一五七五
(五)	天間館中学校	一五七九
(六)	榎林中学校	一五八五
(七)	七戸高等学校天間林分校	一五九〇